

特集
里地
～原風景を守り育てる～

Special Features
Rural land
Protecting and Nurturing Natural Scenery

里地と人・都市をつなぐ 里地モデル
Rural land model linking rural land
with people and cities

乳と蜜の流れる里

エコビレッジの建設を目指して

中島 学

NAKAJIMA Manabu

元長野県東筑摩郡四賀村/村長



1—村づくりの基本 ～循環型社会実現への挑戦～

1991年(平成3年)4月、四賀村の村長を拝命した。従来は行政の外から政策提言をして来たが、立場が変わり、自らが数多の意見提言を集約し政策立案し執行する立場となった。責任の重大さを痛感する傍ら、かねてから暖めて来た夢と希望に溢れた理想郷を、この手で完結してみようと固く心に誓ったものである。

四賀村(平成17年4月の合併により松本市)は長野県のほぼ中央に位置し、面積は90.25km²、周囲を1,000メートル級の山々に囲まれた盆地である。古来16の峠を持ち周辺との往来をしてきたが、現在は上田市—松本市を結ぶ国道143号線と県道2路線が、主な外部との交通網となっている。村土の82%が山林であり、海拔700～900mに自生する赤松の自然林が有名な「あいだの松茸」の産地となっている。標高900～1,000m以上では檜、唐松の人工造林が幅広く展開する。地区森林組合の活動による山林部分の計画的な除間伐は、資源リサイクルを視野に入れた重要な施策となっている。伐り出された中径木は、ログキットに加工されクライנגルテン(市

民農園)のラウベ(1区画ごとに設けられた休憩や簡易宿泊が可能な施設)の建築材に、小径木は土木・ガーデニング用の杭材として循環する。耕地面積は水田123ha、畑107ha、休耕地73haとなっている。全耕地の24%を占める休耕地の活用は地域興しの重要な鍵となる。しかし地味も良く肥沃でアジアモンスーン地帯の一角である日本の耕地は、休耕地であっても大変貴重な存在である。いざとなればその持てる生産力をフルに発揮してくれるであろう。

現在、地球上の耕地面積は15億haあるが、年々砂漠化等で減少を続けている。2015年には13億haになると予想されている。世界中には今なお恒常的飢餓にさらされている人が8億人と推定されているが、耕地面積の減少や人口の爆発的増加を考え合わせた時、農業の未来、なにかんづく休耕地の行方は見えている。

2—先覚者との出会い

1987年(昭和62年)全国養鶏経営者会議の会長として中央農政運動に奔走していた時、巡り合った「日本リサ



■写真3、4—みどりが丘クライנגルテン 夢のくに



イクル運動市民の会」代表である高見裕一氏との出会いは、その後の私の政治活動に大きな影響を与える運命的なものとなった。高見氏の一本筋の通った環境論は不変であり妥協を許さないものであった。この人との出会いは私のふるさとづくりの理念を確固たるものにするに充分であった。私がかねてから抱いていたおぼろげなふるさとづくり構想に、独特な理論付けをして確かなものとしてくれた。構想は村長拝命の5年前から明確な理念に基づいて着々と実行に移された。まさに持続可能な循環型社会形成への第一歩である。

3—村の良さの発見

1982年(昭和57年)から全国養鶏経営者会議副会長として東京暮らしが多くなった。1週間都心で汗にまみれ、土曜の電車で松本に帰り四賀村の家路に着くと、全く生き返った心地になる。これは一体なんだろう。気付いてみればそれは空気、とにかく空気がうまいのである。改めて我が村の空気のうまさを感じ入る。考えて見ればそれはそのはず、人口密度67人/km²という低さで、山林面積6,680haという広大な森林から造り出されるオゾン類はあり余る量であり、大きなキャパシティーを持っている。

限りなく穏やかな空間、なだらかな斜面に点在するゆったりとした古い民家、まさに日本の田舎の原風景である。またそこに息づく村びとの人情のこまやかなこと、道で出会う知らない人にも誰にでも「あいさつ」のことがある。「お早うございます」「こんにちは」「お疲れ様です」と誰でも自然にこまやかなあいさつに出会う。これだけは他所にはない厚い人情と永い時間をかけて村全体に根付いたよい風習であろう。これこそが我が村の宝物として大切に維持し、他から評価されるこの風習に村びとは誇りを持ち、堂々と住み続けるふる里として再確認をしたい。

4—滞在型クライングルテンの提唱

1993年(平成5年)荒廃した桑園の解消とふる里の活性化、都市生活者への幸せの提供という多目的を掲げ、我が四賀村に滞在型のクライングルテンを作ることを提案した。しかしなかなか議会の同意が得られず立往生の状態であった。私は議員各位に個別に説明し説得に努めた。何度もヨーロッパを歴訪しクライングルテンを訪ね、その機能の偉大さに感嘆し、将来日本に必ず必要になるものと確信していたので根気良く説得した。また具体的な手がかりを得るものとして、首都圏及びその隣接地域へ、2,000人を対象としたアンケートを実施した。その結果、クライングルテンへの関心が非常に高く「できれば利用したい」が82%を占めていた。

幸い国・県の補助事業の適用をいただき、平成6年春に20区画をオープンした。応募者は何と500人に及んだ。これで如何に人気の高い事業かの立証ができたのである。

応募理由には「子供と共に緑の空間で思い切り走ってみたい」「誰も邪魔されず自分探しをしたい」「夫婦で思い切り自由にガーデニングを楽しみたい」「無農薬野



■写真1—アルプスを望む、おだやかなふる里



■写真2—間伐材を使ったクライングルテンのラウベ



■写真5—坊主山クライングルテン



■写真6—アルプス自然農場



■写真7—有機無農薬 合鴨水稲田

業を自分の手で作り知人にも分けてあげたい」「村びとと交流しこの村の歴史や文化に浸りたい」というような、ガルテナー（農園利用者）の限らない夢と希望が書かれていた。まさにこの世のパラダイスなのである。こんな夢をもって入居されるガルテナーの皆さんは、何れも農業を知らない人達なので、失敗や落胆をさせてはならない。彼らに安心安全を提供し、懇切なアドバイスをする必要があろうとアイデアを募る。



■写真8—有機センター 循環の基本施設



■写真9—福寿ユーキ(堆肥) 循環有用資源

5—田舎の親戚制の発足

応募した村民の中から選ばれガルテナーと親戚関係を結んだ人達は、着かず離れずの距離から花の植え方を手ほどきしたり、野菜の種播きを指導したり、自宅へ招待したり、田舎の風俗を体験してもらったりと、物珍しさも手伝って大変良い結果を出している。その後、第2期・第3期と設置数も増加するが、応募者は相も変わらず何倍も押し寄せてくれる。

当初心配した議会や村民も意外な人気と驚き、何よりもガルテナーや中央官庁を通じて「信州四賀村にはクラインガルテンがある」「滞在型のクラインガルテンのある所は信州の四賀村だ」というようにPRをしてくれるお陰で、知名度を自然に高めることとなった。

6—クラインガルテン開設の効果

- ① 都市生活者にこれ程喜んでいただける事業は他にはない。
- ② 荒廃して景観を損ねていた遊休農地が生まれ変わり、オトギの国のような素晴らしい景観に変わり、観光スポットとなる。年間の見学者だけでも6,000人を超す。
- ③ 土地所有者は賃貸契約により10アール当たり1年5万円の所得が安定して入る。

- ④ 入居条件にやや厳しい環境保全の制約があり、利用者は自動的に環境保全の学習をする。
- ⑤ クラインガルテンライフを通じて農の偉大さを知り、第2のふる里四賀の自然を満喫できる喜びに浸れる。
- ⑥ 自然回帰の願いを果たし、しみじみと人生の意義を噛みしめる。
- ⑦ こよなく愛する四賀村を離れるに忍びなく、土地を求めて帰農する人が出て来た。
- ⑧ クラインガルテンが始まって村びとの意識が変わる。保守的な考えが開かれたものになって来た。大きな進歩。
- ⑨ 村びとの環境保全の意識がクラインガルテンとガルテナーによって高まった。
- ⑩ かつて来訪者の少なかった村に貸切バスで見学者が次々訪れ、村の魅力を再発見。自分のふるさとに自信を持つ。

ちなみにクラインガルテンには塵箱は一切置かない。テレビの受信は原則できない。塵は見つけた人が必ず拾うなどが定められている。

7—有機農業の振興

先の高見裕一氏は「これ程条件の揃った村は他にはない。中途半端な有機農業は駄目。徹底した無農薬でやるべきだ。このままでは日本の農業は駄目になる。農業



■写真10—里山の循環 薪ストーブ

の確立こそ日本の未来を創る仕事だ。四賀村から先鞭をつけましょう。まず、畑丸ごと買上げ契約でどうだ」と真顔で熱弁をふるった。時に1988年の4月のことだった。

有志が集まり「アルプス自然農法研究会」が結成され、JAS認証を目指した。持続可能な循環型農業の始まりである。合鴨米（除草剤を使わず、合鴨の力を借りる）、馬鈴薯（テントウムシダマシ捕殺）、松本一本葱、坊ちゃんカボチャ、インゲン、桃太郎トマト（糖度6.0以上、有機独特の味）、茄子、ミニトマト、キュウリ、シソ葉等総てJASの認証を取得することができたのである。

農業で土を汚さないことに努め、地下水をきれいに守り、きれいなふる里を目指してきた。信濃川の最上流部に位置し、水源地に住む者の責任として、決して川を汚染してはならないのである。豊かな水、きれいな水の供給は国民の義務と考える。農業汚染のないきれいな農地、有機質肥料で十分な地力、有用バクテリアが多く棲む土、そこで発芽し遅く育つ有機農産物をまず自らが食し、欲しても手に入らない都市生活者にも宅配される。

この崇高な努力を支えるもう1つの仕組みがある。1,800世帯の生ゴミだ。以前は焼却場で処理していたが、今は各家庭の生ゴミ処理機で中間処理し自家農園に返している。畑を持たない家庭のものは1kg当たり5円で村が買い上げ、有機センターで処理して完熟堆肥とする。有機センターで生産される堆肥「福寿ユーキ1号」は年間2,000tを超える。かくして村内の畜産厩肥、脱水ケー



■写真11、12、13—活力ある里山施策が評価されグランプリを含む大きな3賞受賞

キ、家庭生ゴミは化石燃料に頼ることなく地域内循環を始めたのである。

8—村ぐるみでエコビレッジの建設

役場庁舎を訪れた人の目に真っ先に飛び込むのは大型の薪ストーブだ。健康な山造りのため毎年除間伐が行われるが、従来は捨てていたものを、森づくりの大切さのPRのために、薪にして役場庁舎の暖房に使う。来訪者がここで暖をとり、世間話に花が咲くコミュニケーションの場となっている。見上げればISO14001認証の横断幕が掲げられている。役場庁舎、保育園、有機センターなど村の主要施設が環境マネジメントの対象だ。庁舎の屋根には太陽光発電パネルを設置している。役所は土日と祝祭日が閉庁となるが、太陽光発電は太陽がある限り働き続ける。役場庁舎の使用電力の大部分を賄うことができ、CO2の排出を伴わないクリーンエネルギーとして意義は大きい。デジタル表示盤に刻々と表示される発電量に見入ると、真に環境問題と向き合っている実感が湧いてくる。

9—事業推進の経過を省みて

「エコビレッジ四賀」を提唱しながら1つ1つを政策として形づくり、それを具体化してこれたのはよき指導者に恵まれたことと、1,800戸という小さな村故に小回りが利き、政策が良く浸透できたからだと思う。1993年（平成9年）、村づくりが評価され「ふるさとづくり大賞」グランプリに輝き、総理大臣賞を受賞した。また自治大臣より「うるおいと活力ある街づくり賞」を受賞し、さらに全国優良町村表彰と3つの大きな賞をいただいた。中山間地の寒村ながら、村民にやればできるの自信を持ってもらったことに満足している。

本当の豊かさとは何か、本当の幸せって何だろう、汲めども尽きない課題である。

環境問題を乳と蜜の流れる里（「乳と蜜の流れる地」旧約聖書：桃源郷、ユートピア）、静かな中山間地の四賀から問い続けていきたい。

<写真提供>
写真2、5：塚本敏行 他写真：筆者